2014年度　卒業論文　　2015年　1月31日

歴史的景観キャラクタライゼーションによる長野県宮田村の景観特性の把握に関する研究

1X11D020-1　大村　珠太郎※
Tamataro OMURA

本研究では、長野県宮田村を対象地とし、地域特性と歴史的景観特性を把握する事を目的とした。歴史的景観アセスメントの手法の一つである歴史的景観キャラクタライゼーションの地図により長野県宮田村の歴史的景観特性の把握をした。さらに断面図により示された空間構成要素を歴史的景観特性と重ね合わせ宮田村における景観の特徴を明らかにした。

Keywords：景観特性把握、宮田村、歴史的景観キャラクタライゼーション、景観アセスメント

1.　研究の背景と目的

1.1 研究の背景

近代の地方都市では、交通網の整備による産業構造の変化や急激な都市化が、田園や古くから残る町並み、里山等の地域らしさを感じられる景観の喪失を招いた。さらに、大量の人工構造物が自然景観内に持ち込まれていった結果、地域の日常的な景観が急速に変化し、地域の特性が失われているという現状がある。

長野県宮田村でも、中央自動車道や国道などの交通網の整備がされた結果、市街地の形成や工場の進出、沿道の開発などにより、元来の田園風景や集落の町並みの変化が生じている。またバイパスの施設計画が進んでおり、今後無秩序に都市整備が行われていくことで、宮田村の固有の特性が失われることが懸念されている。一方、文化財などの指定は無いが、伊那街道沿いの「宮田宿」や縄文時代前期初頭に存在した300軒を超える密集した家の跡が「中越式」土器と共に中越遺跡から発見されており、歴史を感じられる地域がある。しかし、保全すべき歴史的景観の範囲や歴史的価値に関してあまり認識されていない。

今後、地域住民と地域の特性や歴史的景観を考えていく上で、各地域らしさや歴史的景観特性を感じられる要素とそのエリアを明らかにすることが必要である。さらにその形成に至る歴史を重ね合わせて比較することが必要であると考えられる。

1.2 研究の目的

宮田村は時代の変化とともに、道路や土地利用の変化が激しい地区である。さらに各地域によって現在の姿が形成されるまでの時間差がある。本研究では、長野県宮田村を対象地とし、道路や宅地、森林、農地、工場、寺院などの土地利用の歴史的景観特性を多種類な地図を用いて年代特定を行い、地図上でキャラクタライゼーションを行う。さらに風景を構成する空間構成要素を示した断面図と重ね合わせることで、より詳細に宮田村の景観特性を明らかにすることを目的にする。

2.　研究の手法

2.1 歴史的景観キャラクタライゼーション（HLC）

「歴史的キャラクタライゼーション(HLC：Historic Landscape Characterisation)」[6] は、国土全域に適用する歴史的景観特性アセスメント方法を確立している。もともとHLCは英国の遺産をエリアとして把握する為にこの方法論が確立した。HLCは、土地利用の年代特定を地図上で行い、これを景観の「時間的奥行き（Time-depth）」と呼び、歴史的価値を評価している。

2.2 既存研究

(1) 歴史的景観キャラクタライゼーションを用いた研究

歴史的景観キャラクタライゼーションを作成し、地域の景観特性を把握する研究として宮脇による研究 [3) 4) 5)]が挙げられる。本研究では、歴史的景観キャラクタライゼーションの分析手法として、宮脇による鎌倉を対象とする研究 [3)] を参考にする。この論文は鎌倉市中心部を取りあげ、歴史的景観特性をエリアで特定している。景観保全に役立てる景観特性アセスメント手法の一つである「歴史的景観特性アセスメント」として、「歴史的道路と街区の評価」と「歴史的土地利用の評価」を組み合わせ分析している。宮脇らの研究は道路や街区、水路といった歴史的景観要素もキャラクタライゼーションのその方法に取り組んでいる。方法を以下に説明する。

①道路と線路の位置から、道路の形成された年代を特定し図に示し、その年代毎の割合を表に示している。②道路の年代特定を基に、それによって囲まれる街区の形成年代の特定をしている。その後、街区数、割合、面積の関係を表に示している。③土地利用の歴史的調査を1875年、1931年ー1949年、1961年、1966年、2009年の五つの年代を対象に行い、地図上で復元し、色分けした。宅地、畑、水田、草地、森林、水路、寺社・墓地

※　早稲田大学創造理工学部社会環境工学科　景観・デザイン研究室　学部4年

に分類されている。そして、各年代の土地利用面積と割合を算出している。④五つの年代別の土地利用の復元図を基に、各年代の不変化の土地を特定し、いつその土地利用が形成されたのかを抽出している。これにより、現在に至る土地利用の時間的奥行きからみて、歴史的景観のキャラクタライゼーションを整理している(図2.1)。 また、その後どの年代に形成されたのかを表にまとめ、面積の割合を特定している。

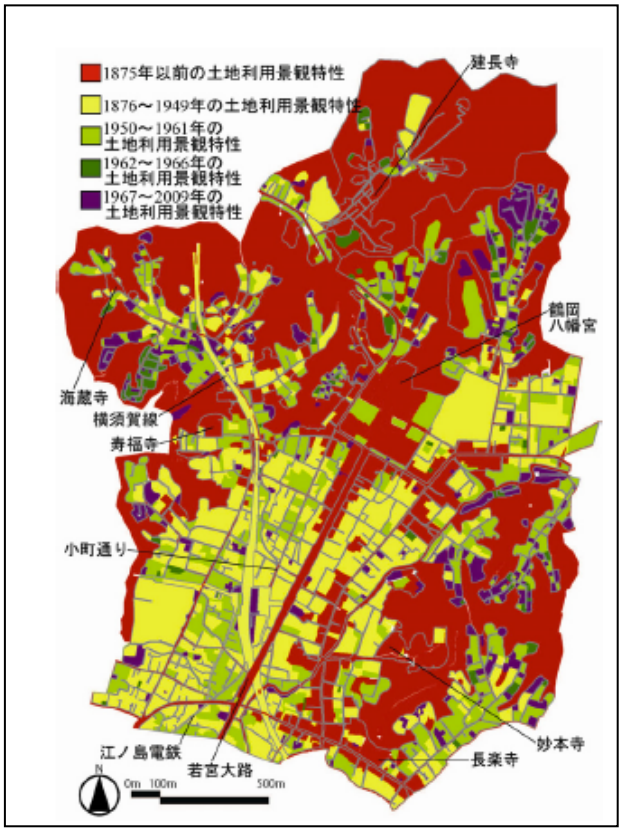

図 2.1 土地利用の形式年代特定[3)]

本研究ではこの方法を参考にし、①（道路及び線路の年代特定、歴史的景観キャラクタライゼーションの作成）→③（土地利用の年代特定、復元図の作成）→④（歴史的景観キャラクタライゼーションの完成）の手順で行い、長野県宮田村の歴史的景観特性を把握した。

(2) 「空間-社会」構造図を用いた研究

藤倉らによる「空間-社会」構造図を利用している研究[7) 8) 9)]が挙げられる。長野県旧開田村（髭沢地区）を対象地とし、風景をつくる空間的な要素を平・断面図に示し、文献調査、現地調査、ヒアリング調査から得られた社会的な活動との関係を対応表にしている。そして、縦軸に社会的活動を、横軸に地域空間の構成要素をとって、面的に情報を統合した構造図にまとめ上げている。これを「空間―社会」構造図と藤倉らは呼んでいる。

本研究では、断面図による空間構成要素を把握する所を参考にする。まず、風景の空間的な構成を把握するため、調査で得た情報を平面図にまとめていく。その後、道路と直行する断面図に書き起こして分析する。平面図からは空間構成要素のまとまりとして「領域」の存在を、断面図からは、その「配置」の関係を読み取ることが出来る。そして、平面図と断面図の情報を組み合わせると、地形の高低差を処理する段丘崖の部分には、敷地や土地利用の「境界」が集中していることが把握できる。

2.3 本研究の位置づけ

本研究では、地区毎に現存の姿が形成されるまでの時間の奥行きの差があり、保全すべき歴史的景観の範囲や歴史的価値に関してあまり認識されていない長野県宮田村を対象地とする。道路及び線路と土地利用の歴史的景観キャラクタライゼーションを行い明らかになった歴史的景観特性と断面図によって把握出来た空間構成要素を重ね合わせることで、宮田村の景観特性の把握の一助となることを期待する。

3.　対象地概要

3.1 対象地の選定

長野県宮田村は景観法に基づき、景観計画の策定に取り組んでいる。歴史を感じることが出来る地域はあるが文化財などの指定は無く、また価値等の認識が景観レベルでされていない。今後景観計画を行っていく上で、地域の特徴や歴史的景観特性を把握する必要がある。そこで本研究では、地区毎に今の姿を形成するまでに時間の奥行きの差があり、歴史的景観キャラクタライゼーションの方法論を利用することで歴史的景観要素を把握する必要がある、長野県宮田村を対象地として選定した。

3.2 長野県宮田村の概要

長野県宮田村は上伊那群の中央に位置し、面積54.52㎢、人口は、9,266人（平成27年1月1日現在）[1)] である。宮田村は南端に太田切川、東端に天竜川が流れている。太田切川の左岸の扇状地である平野部と、中央アルプス駒ヶ岳に至るまでの深い山地からなっている。また、地方の少子高齢化や人口減少が問題となる中、宮田村は人口が2000年から現在にかけて約600人も増加している[2)]。

宮田村は村内の全農家が参加し一村一農場を目指す独自の農業システム「宮田方式」で農業の管理を行う活力のある村である。また、1954年に一度駒ヶ根市との合併を行ったが、2年後には取り消すなど宮田村としての地域性が高い。そして、昔から存在する集落が今も残る一方、バイパスの計画がされているなど、変化が激しい村である。

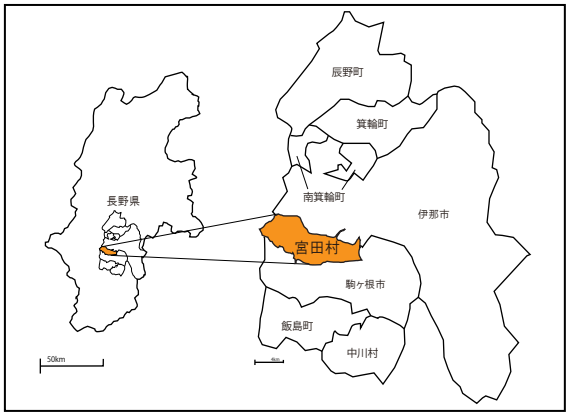

図3.1 宮田村の位置

3.2 各行政区の特徴

本研究の対象とする長野県宮田村は「北割、南割、町割、新田、大田切、中越、大久保、つつじが丘、大原」９つの行政区から構成されている。各地区の特徴を整理しておく。

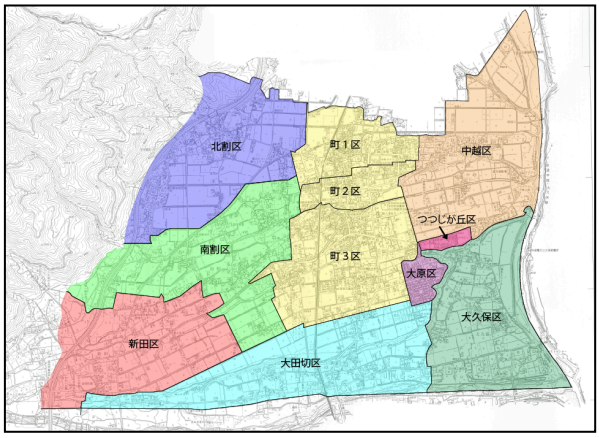

図 3.2 宮田村の行政区割り [11)]

① 北割

北割の中央に真慶寺が存在する。真慶寺の裏側にある宮田観音から村を見晴らす事が出来る。棚田が広がり、中央部には伝統的集落が集中して存在している。その一方で新しく出来た北割団地もある。

② 南割

昔から存在する田中道や姫宮神社がある。棚田が広がる中に小規模開発が所々に見られる。

③ 町割

JR飯田線の宮田駅が存在し、中心市街地となっている。また、国道153号線や旧道が通り、南北の交通が良くわかる。近年では空洞化や小規模開発がみられる。また宿の趣が残る宮田宿や祇園祭で知られる津島神社が南北に渡る伊那街道沿いに存在している。

④ 新田

リンゴの果樹園が左右に立ち並ぶ道（以下、リンゴロード）があり、中央自動車道を挟んだ山裾に集落がみられる。所々に工場も見られるが、ふれあい広場や宿泊施設があり、観光の拠点となっている。

⑤ 大田切

段丘が存在し、高低差がある。工場が点在し、小規模開発も見られる。またバイパスの計画予定地の一つである。

⑥ 中越

縄文時代から存在が確認されている集落が存在し、その集落に沿う道には水路が通っている。また段丘もあり、集落下に水田が広がっている。また、中越遺跡からは約六千年前の縄文前期初頭の遺跡が多く出土している。

⑦ 大久保

段丘が存在し、高低差がある。工場が点在し、小規模開発も見られる。東側には天竜川が流れ、天竜川沿いには大久保ダムや駒ヶ根市との境である大久保橋、駒ヶ獄蚕玉神社、熊野神社がある。また、バイパスの計画予定地の一つである。

⑧ つつじが丘

村営住宅が存在する。また、奥にグラウンドが存在する。

⑨ 大原

分譲住宅が広がる。また、大原天満宮がある。

4.　歴史的景観特性分析

4.1 宮田村の歴史的景観キャラクタライゼーション分析

長野県宮田村における「道路及び線路・土地利用」のキャラクタライゼーションを行う。これに用いる国土地理院の地図や航空写真を表に整理した（表4.1）。

表4.1 国土地理院地図、航空写真の整理表[11)]

年代	地形図(5万分の1)※赤穂	地形図(2万5千分の1)※伊那宮田	航空写真
1911年(明治44年)	○		
1925年(大正14年)	○		
1931年(昭和6年)	○		
1947年(昭和22年)			○
1952年(昭和27年)	○		
1956年(昭和31年)			○
1965年(昭和40年)			○
1966年(昭和41年)	○		
1971年(昭和46年)	○		
1976年(昭和51年)		○	○
1978年(昭和53年)	○		
1987年(昭和62年)		○	
1989年(平成元年)	○		
1998年(平成10年)			○
2000年(平成12年)			○
2001年(平成13年)		○	

※地域名

表4.1で橙色に示した国土地理院の地形図を利用する。1911年、1925年、1931年、1952年、1966年、1971年、1978年、1989年は5万分の1の地形図を、2001年は2万5千分の1の地形図を用いる。

これに加筆し、歴史的景観キャラクタライゼーションを行った。5万分の1の縮尺の地形図で読み取りづらい所を航空写真で確認した。また、今後の土地利用の復元図の作成や形成年代の特定はすべて同じ国土地理院地図の地形図から作成した。

① 道路及び線路における形成年代特定

道路及び線路における歴史的景観キャラクタライゼーションを行い、2001年の形成年代特定図を載せる（図4. 1）。

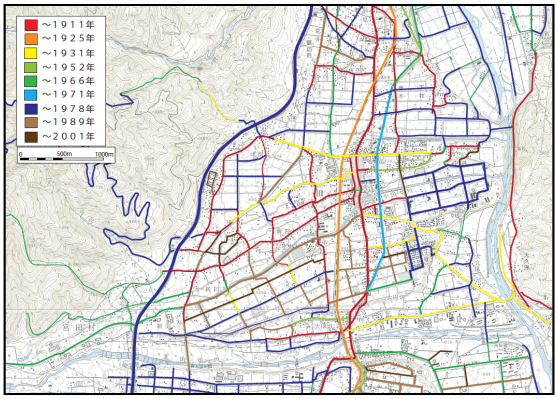

図 4. 1道路及び線路の形成年代特定（2001年）[11)]

② 土地利用復元図の作成

1911年から2001年までの土地利用の復元図を作成し、変化を把握した。1911年と2001年の土地利用復元図を示す（図4. 2～4. 3）。

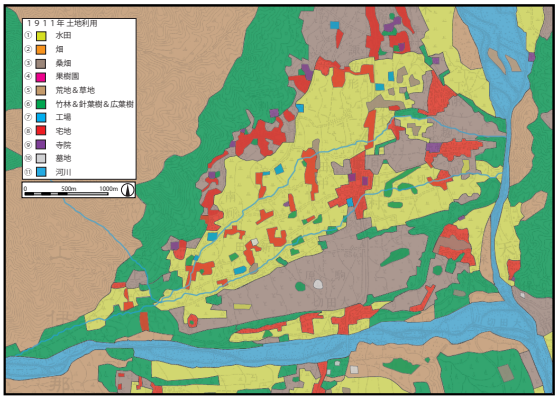

図 4. 2 土地利用の復元図（1911 年）[11)]

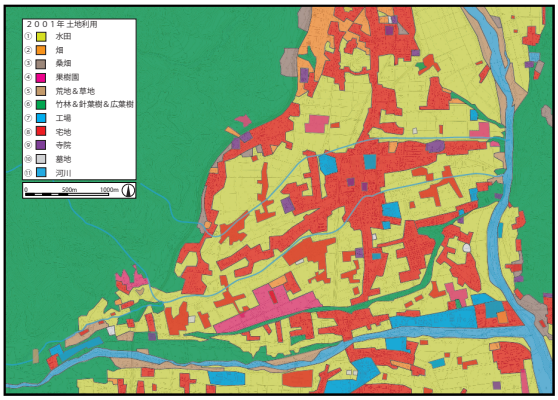

図 4. 3 土地利用の復元図（2001 年）[11)]

土地利用の復元図を作成することにより、1911年に存在していた桑畑が現在では大きく変化し水田と果樹園になり、宅地は町割を中心に大きく広がっていることが把握できた。

③ 土地利用における歴史的景観キャラクタライゼーション

土地利用における歴史的景観キャラクタライゼーションを行い、2001年の形成年代特定図を図4. 1にも示した道路及び線路の形成年代特定図を重ね合わせた図も載せる。（図4. 4）

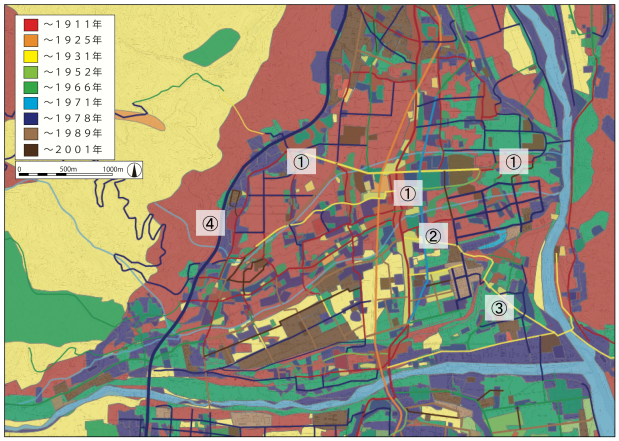

図 4. 4 道路及び線路と土地利用の形成年代特定（2001年）[11)]

歴史的景観キャラクタライゼーションを行ったことにより1911年から道路及び線路と土地利用の変化が無いエリアを把握できた。中越、北割地区の伝統的集落が現存するエリアと、かつて宮田宿として使用されていた伊那街道（旧道）沿いの町割のエリアである。このように道路及び線路と土地利用の変化がないエリアが、長野県宮田村においての「歴史的景観特性」であると把握できた。

また土地利用の大きな変化があると把握出来たのは、1931年、1966年、1978年である。1931年では大田切、新田地区にある桑畑が水田に変化した。1966年では、中越、大久保、新田地区の多くの桑畑や広葉樹、針葉樹が水田に変化した。1978年では、全面的に宅地が増えた。これらの変化やエリアとして把握できた事を道路及び線路との関係から考察する。

①歴史的景観特性（中越集落、北割集落、町割宮田宿）

歴史的景観キャラクタライゼーションによって求められた歴史的景観特性は、伝統的な集落が現存する中越集落、北割集落とかつて宮田宿として使用されていた、伊那街道（旧道）沿いの町割の宮田宿であった。中越集落と北割集落は宮田村役場前道路を通っている。また、伊那街道（旧道）沿いに、町割の宮田宿があった。これについては次の章で詳しく分析する。

②国道 153 号線

国道 153 号線は 1971 年に開通した。周辺の土地利用への影響はすぐには現れてはいないが 1978 年に大きな変化をもたらしている。1978 年の土地利用復元図を見ると 153 号線沿いに宅地と工場が増えているのが把握できた。

③国道 213 号線

国道 213 号線は 1925 年ー1931 年に開通し、その間に道路周辺に宅地ができた。それだけではなく大久保地区は、213 号線を中心に 1966 年、1978 年と次々に宅地が増えた。大久保地区と駒ヶ根市を繋ぐ道路でもあり、道路の線形は変わらず存在し続け、大久保地区の発展につながる道路となった。

④中央自動車道

中央自動車道は１９７５年に開通した。中央自動車道は大きな変化をもたらした。中央自動車道が通る所に存在した宅地の位置はなくなり、森林は切り開かれ、寺院の位置も変化させる程の影響力であった。その後中央自動車道を境に、宮田村市街地側は宅地の開発や工場の進出が増える一方、山側の開発は途絶えさせた。宮田村に大きな変化を与えた。

以上の結果から、道路及び線路の形成が周辺の土地利用に与える影響が大きいという事がわかった。さらに道路及び線路が形成による影響力が土地利用を変え、歴史的景観特性の範囲が狭められている事につながると把握できた。

5.　歴史的景観特性による空間構成要素の特徴の把握

5.1 歴史的景観特性から見る空間構成要素の特徴の把握

4章では、歴史的景観キャラクタライゼーションにより「歴史的景観特性」を把握した。この「歴史的景観特性」から「空間構成要素」を重ね合わせて分析することにより、長野県宮田村の価値のある景観特性の範囲と特徴を把握することができた。

分析方法としてはまず道路及び線路のキャラクタライゼーションを断面図に重ね合わせ、道路及び線路の形成年代の特定をエリアとして把握した。これにより、道路及び線路上の「歴史的景観特性」から見る「空間構成要素」の特徴を把握することが出来た。

次に、道路及び線路周辺の土地利用のキャラクタライゼーションを断面図に重ね合わせ、土地利用の形成年代の特定をエリアとして把握した。これにより、土地利用上の「歴史的景観特性」から見る「空間構成要素」の特徴を把握することが出来た。この2つの分析を、歴史的景観特性が強く残り、特徴がある「宮田村役場前道路」と「伊那街道（旧道）」の道路及び線路とその周辺の土地利用で行った。

今回はその中でも、土地利用を重ね合わせた分析を以下の図示し、長野県宮田村の歴史的景観要素から見た空間構成要素の特徴を把握した（図5.1ー5.4）。

①宮田村役場前道路

宮田村役場前道路の分析を以下の図に示す(図5.1ー5.4)。

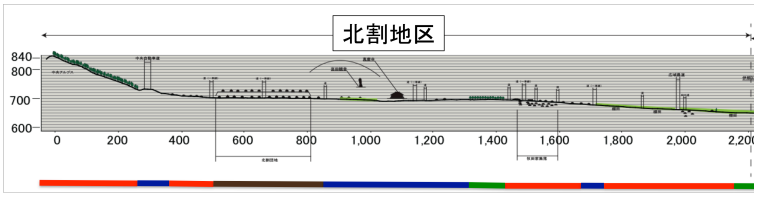

図 5.1 宮田村役場前道路と土地利用の形成年代特定の重ね合わせ（北割）

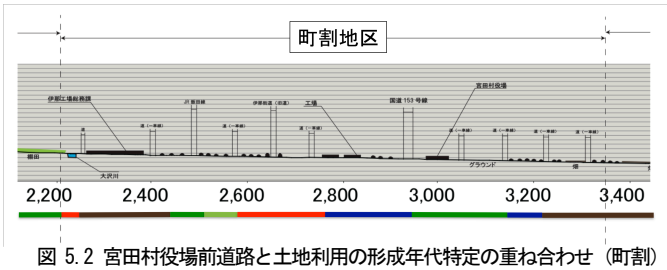

図 5.2 宮田村役場前道路と土地利用の形成年代特定の重ね合わせ（町割）

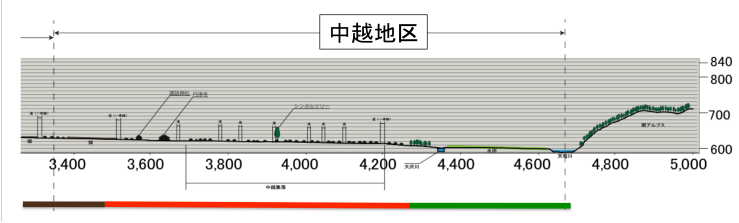

図 5.3 宮田村役場前道路と土地利用の形成年代特定の重ね合わせ（中越）

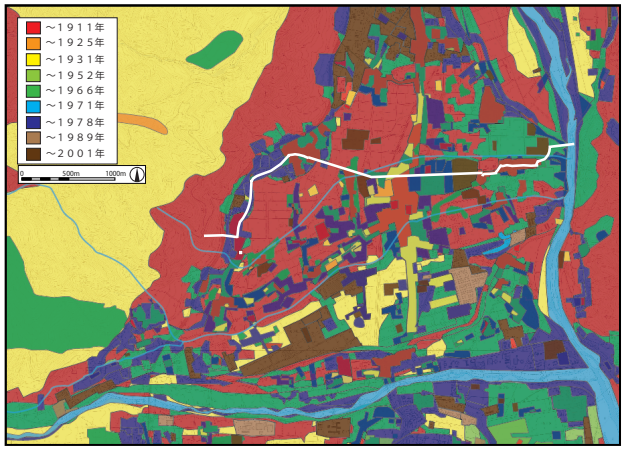

図5.4 宮田村役場前道路と土地利用の形成年代特定の重ね合わせ（平面図）[11)]

この分析により、北割地区や中越地区の伝統的集落は形成年代が最も古い1911年以前であることがわかった。これは、道路及び線路の形成年代と同様である。

次に、町割地区の伊那街道周辺の土地利用が1911年以前であるとわかった。伊那街道においての分析でも述べるが、伊那街道周辺は宮田宿として使われていたエリアであり、歴史的景観特性として把握できた。

そして、北割団地や町割地区の工場の形成年代は最も新しい1989ー2001年の間であり、小規模開発や工場の進出をエリアで把握出来た。

①伊那街道（旧道）

伊那街道（旧道）の分析を以下の図に示す。（図5.5～5.8）

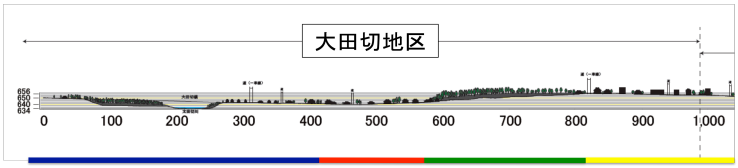

図 5.5 伊那街道（旧道）と土地利用の形成年代特定の重ね合わせ（大田切）

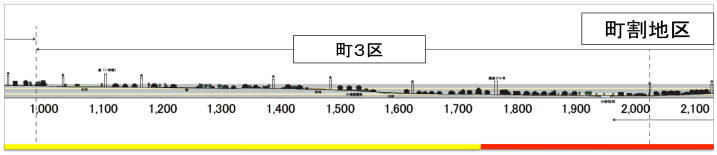

図 5.6 伊那街道（旧道）と土地利用の形成年代特定の重ね合わせ（町3区）

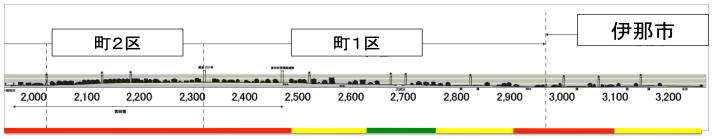

図 5.7 伊那街道（旧道）と土地利用の形成年代特定の重ね合わせ（町1.2区）

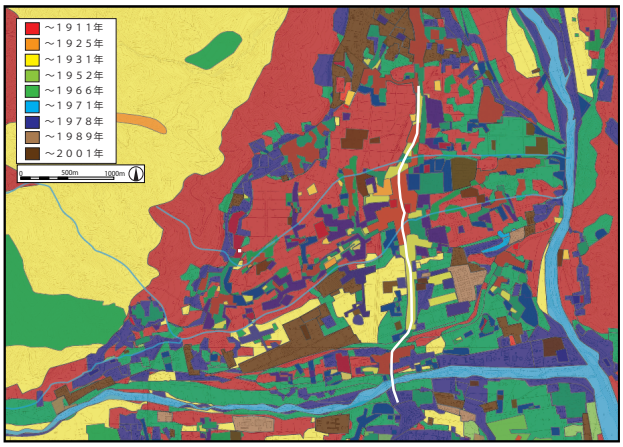

図 5.8 伊那街道（旧道）と土地利用の形成年代特定の重ね合わせ（平面図）[11)]

伊那街道（旧道）と土地利用の形成年代特定の重ね合わせを行った結果、まず町2区を中心に広がる宮田宿の周辺の年代特定が最も古い1911年であるとわかった。町2区周辺に多く残る宮田宿として使用されていたエリアは、現地調査をしている時にも存在感をあった。

次に宮田宿周辺の町割地区は基本1931年以前に形成されていると把握できた。伊那街道（旧道）は153号線や中央自動車道、広域農道などが整備され交通量は減ったものの、南北の交通の一つとしてあり続けている。そのため、宮田宿やその周辺の土地利用の変化も少ないことが明らかとなった。

6. 結論

本研究は宮田村の景観特性の把握を目的としたもので、歴史的景観キャラクタライゼーションにより把握できた「歴史的景観特性」と断面図によって把握出来た「空間構成要素」を明らかにした。この２つを重ね合わせることで、宮田村の景観特徴の把握をした。

その結果、伝統的な集落が現存する中越集落、北割集落と伊那街道（旧道）沿いに位置する宮田宿が、長野県宮田村の歴史的景観特性であると把握できた。また宮田村役場前道路は中越集落と北割集落とった「歴史的景観特性」をまたがっている。その一方で、北割団地や工場など新たに開発されたエリアを通り、宮田村の空間構成要素における、形成年代の奥行きの差を読み取る事が出来る骨格であると把握できた。また、道路及び線路が形成されることにより土地利用を変化させ、歴史的景観特性の範囲が狭められている事につながると把握できた。

＜参考文献＞

1) 宮田村HP　http://www.vill.miyada.nagano.jp/
2) 総務省統計局 http://www.stat.go.jp/index.htm
3) 宮脇勝：「歴史的景観キャラクタライゼーションに関する研究―鎌倉市中心部の寺社・道路・街区・水路・土地利用の歴史的景観特性アセスメント―」都市計画論文集　Vol.47 No.3 2012.10
4) 松倉史英、宮脇勝：「江戸東京最都心部における道路と街区の形成年代に関する研究―東京都中央区全域及び月島地区の街区の歴史性―」都市計画論文集　No.41-3 2006.10
5) 宮脇勝、唐圻亮：「中国上海市における外国人居留地の歴史的景観キャラクタライゼーションに関する研究―イギリス人居留地を対象として―」都市計画論文集　Vol.49 No.1 2014.4
6) J. Clark, J. Darlington, G. Fairclough (2004), Using Historic Landscape Characterisation, English Herotage
7) 中村良夫、鳥越皓之:「風景とローカル・ガバナンス」 早稲田大学出版部 2014
8) 藤倉英世、山田圭二郎、羽貝正美：「地域景観と地域社会の相関小僧及び景観の内的システムの生成・発現にかんする実証的研究」、土木学会論文集D Vol.66 No.3 pp.394-413 2010
9) 藤倉英世、山田圭二郎、羽貝正美：「基礎自治体の景観を巡る政策循環プロセスと自治の基盤の再構築に関する実証的研究―長野県旧開田村の景観を巡る政策郡を対象として―」 土木学会論文集D3 Vol.68 No.3 pp.160-179 2012
10) 中村良夫：「都市をつくる風景」藤倉書店 2010
11) 国土地理院地図データ
12) 宮田村史上・下巻　宮田村誌刊行会　1982・1983